THE ザ・プレス PRESS 国際高

発行所
富山市願海寺水口444番地
富山国際大学付属高等学校
新聞部
ホームページアドレス：http://www.tuins-h.ed.jp
印刷所　北日本印刷株式会社

6つの部 いざ全国へ

夏の陣で大舞台に挑む

今年も、運動部・文化部ともに大躍進を続ける国際高。この夏、テニス女子、バドミントン、弓道、放送、新聞、ユネスコの6つの部が全国大会に出場する。

女子テニス部
3部門でインターハイ出場

女子テニス部は、5月に行われた県高校春季大会のダブルスで林果音（28H）長山真凜（26H）ペアが優勝し、インターハイの出場を決めた。

また、6月の県高校総体では団体戦で優勝、個人戦シングルスでも林果音さんが優勝を勝ち取り、それぞれインターハイへの切符を手にした。

女子テニス部は部員の仲が良く、どんなに辛い練習でもチームメイトの声援で頑張ろうと思えるような、明るい雰囲気だという。現在はインターハイで勝ち進むため、確実に自分の打点に入って打てるような練習や、粘り強いラリーができるように体力をつける練習を今まで以上に行なっており、さらに北信越大会で見つかった課題点の修正を図った練習にも励む。

団体、シングルス、ダブルスすべてで3冠に輝いた林さんは「シングルスは1回戦突破、ダブルスはベスト16以上進出という目標を達成できるよう、チャレンジャー精神で思いきり自分のプレーをしてきます」と決意を述べた。また、主将の田畑つぐみさん（34H）は団体戦について「インターハイではこれまでの練習の成果を発揮し、最後まで悔いの残らないよう全力でプレーして、ベスト8入りを目指して頑張りたい」と目標を定めた。

インターハイは8月1～8日、宮崎県宮崎市のKIRISHIMAヤマザクラ県総合運動公園と生目の杜運動公園で行われる。

県高校総体優勝の団体メンバー

北信越大会で団体優勝

バドミントン部
ダブルス・シングルスでインターハイへ

バドミントン部は、6月1～3日に行われた県高校総体の女子個人対抗ダブルスで松井収那（29H）平田偲（27H）ペアが優勝、シングルスで石森まゆさん（25H）が準優勝を勝ち取り、2部門でインターハイ出場の切符を手にした。また、6月15～16日に出場した第42回北信越高校大会では女子学校対抗で優勝に輝いた。

現在はインターハイに向け、まずは雰囲気を良くするためにチーム全員が元気よく声を出すことを心がけ、プレー面では互いに切磋琢磨し高め合っている。毎日、自分達の課題を見つけ出し、高い意識を持って練習に取り組んでいるという。

主将の松井さんは「目標はベスト8。インターハイという最高の舞台でプレーできることに誇りを持ち、自分達らしいプレーができるように頑張ります」と決意を述べた。

インターハイは8月1～5日、熊本県芦北町の芦北町民総合センターと八代市の八代白百合学園高校で行われる。

弓道部
渡邊君インターハイへ

弓道部は6月1日に行われた県高校総体において、渡邊龍成君（37H）が近的男子個人の部で16射16中の成績で優勝し、8月7～10日に宮崎県都城市の早水公園体育文化センターで行われるインターハイへの切符を手にした。また、6月16日に出場した第49回北信越高校弓道大会でも見事、優勝を果たした。

渡邊君はインターハイに向けて、一射一射を集中して引くように心がけ、自分の今できることと、やるべきことを考えて試合までの日々を大切に練習しているという。

「みんなの期待を背負って大会をやりきり、入賞できるよう頑張りたい」と真剣な表情で抱負を述べた。また、個人の目標については「千射万節（せんしゃばんせつ）、一本一本を大切に、入賞を目標としています」と笑顔で語った。「千射万節」とは弓道の心得をいう言葉で、「節」は矢のこと。千本万本の矢を射るときでも、今射る矢をおろそかにせず、新たな気持ちで臨むべきという意味だ。

インターハイには全国からトップ選手が集う。その中で、渡邊君には最善を尽くして健闘することを期待したい。

北信越大会でも優勝した渡邊君

放送部
40年連続でNHK杯に出場

放送部は6月16日に行われた第58回県高校放送コンテストで、ラジオドキュメント、テレビドキュメント、研究発表の3部門で優秀賞を獲得し、7月22～25日に東京で行われる第66回NHK杯全国高校放送コンテストに40年連続で出場が決定した。

また、7月31日～8月1日に佐賀県基山町の基山町民会館と基山町総合体育館の2会場で行われる、第43回全国高校総合文化祭放送部門にもオーディオピクチャー（AP）部門で出場する。

放送部は、互いに協力し合える温かいチームで、現在は全国大会に向け様々な所へ取材に行き、作品の制作に励んでいるという。部長の中田明里さん（33H）は「NHK杯の目標は準決勝進出。やるべきことをやり切ったので、大会を楽しみたいです」と意気込みを見せた。

新聞部
佐賀総文祭へ

新聞部は、7月29日から8月1日にかけて佐賀県佐賀市の佐賀勤労者体育センターで行われる第43回全国高校総合文化祭新聞部門に出場する。本校は「全国高校新聞年間紙面審査」に23年連続で入賞しており、今年も受賞が期待される。また、全国の高校新聞部員で編成された班で佐賀県内各地を取材し、交流新聞を作成する。

部長の松田穂乃佳さん（32H）は「全国から集まった生徒達と競い合い、良いところをしっかりと吸収したいです」と抱負を述べた。

他に、北日本新聞に掲載される「らいちょう」や、全国の高校に配布される「そうぶんニュース」（松田編集長）の取材・編集も行う。

なお、松田さんは全国高総文祭に参加する約230人の富山県生徒を代表し、7月27日に佐賀市文化会館で行われる総合開会式に出席して、富山県をPRする大役も担っている。

ユネスコ部
多くの大会に挑戦

ユネスコ部は、7月27～29日に佐賀県白石町の有明スカイパークふれあい郷自有館で開催される第43回全国高校総合文化祭ボランティア部門に、井波央珠さん（31H）、荒井美穂さん（32H）、藤井志帆さん（33H）が参加する。また、28・29日に多久市の中央公民館で開かれる弁論部門に、松田穂乃佳さん（32H）が出場する。

さらに、多くの大会に出場することが決まっている。北東アジア青少年環境活動リーダー育成事業ロシア大会（8月4～8日）に井波さん、岡田杏樹菜さん（32H）、川口藍花さん（33H）。奈良で行われる第19回高校生日本語弁論大会（8月8日）にドウ・ジャーチーさん（32H）、同じく奈良で開催される第56回全国国際教育研究大会（8月9日）に廣岡愛波さん（31H）、松田さん、藤井さん。また、兵庫県で開催されるソロプチミストのユース・フォーラム2019 in 神戸（7月24～25日）に村田楓華さん（31H）が出場する。

過ごしやすい国際高に

令和元年度後期生徒会役員選挙の投票が7月10・11日の2日間、行われた。今回は副会長のみが選挙戦となり、会長、会計は信任投票となった＝写真左。生徒会長に星野まどかさん（24H）が選出され、新執行部が発足した。新聞部は星野新会長＝写真右＝にインタビューした。

生徒の意見を反映します

生徒会　星野新執行部が発足

Q1．どうして生徒会長になろうと思ったのですか？

A．ここ最近の生徒会執行部は、多くの生徒の声を反映しており、より過ごしやすい学校へと生まれ変わってきました。しかし、まだ私たちにはできることがたくさんあると思います。国際高をより良い学校とするために尽力したいと思ったからです。

Q2．生徒会長として、どんな活動に力を入れたいですか？

A．今期生徒会の活動のコアとなるのは、「過ごしやすい学校作り↓生徒の意見の反映」です。また、具体的な活動としては、文化活動発表会の活性化、図書室のシステムの改善などです。この2点を中心に進めていきたいと考えています。

Q3．生徒会長としての抱負をお願いします。

A．意見を100％反映させることは正直難しいですが、寄せていただいた意見1つ1つにしっかり向き合って話し合い、回答することを約束します。

Q4．国際生へメッセージをお願いします。

A．高校3年間をより充実したものにするためには、やはり全校生徒の力が必要不可欠です。皆さんの協力なしでは実現できません。そして何より、学校は生徒一人ひとりが主役の場です。生徒全員で力を合わせ、より良い学校生活を実現しましょう。

星野新執行部の活動に期待したい。

【高島拓馬】

青龍団が総合優勝

歓喜あふれる青龍団

第56回体育大会

巻き起こった国際旋風

第56回体育大会が6月13日、「獅子奮迅～巻き起こせ国際旋風～」のテーマのもと開催され、4つの団が白熱した戦いをみせた。

グラウンドコンディションのため開催が1日順延されたが、当日は晴天に恵まれた。予行が悪天候により行われなかったため、種目の予選が行われず、得点の配点が変更されるなどしたが、無事に各競技が進んだ。各部門の順位は次のとおり。

総　合＝1位　青龍団
　　2位　白虎団
競技の部＝1位　朱雀団
　　2位　青龍団
応援の部＝1位　白虎団
　　2位　青龍団
デコの部＝1位　青龍団
　　2位　朱雀団
衣装の部＝1位　白虎団
　　2位　青龍団

今年、総合優勝に輝いたのは、青龍団だった。青龍団団長の森田向陽君（36H）は「青龍団に関わった全ての人に感謝したい。優勝できたのも、僕たち団リーダーについてきてくれた団員みんなのおかげです。本当にありがとう！」と団員に感謝の言葉を述べた。

午後の部は応援合戦から始まり、どの団もキレのあるダンスや迫力あるエールを披露して、大変盛り上がったものとなった。応援優勝に輝いたのは、白虎団。白虎団応援団長の竹澤紀子さん（34H）は「本番は緊張と不安で足が震えたが、団員全員に支えられ楽しく踊ることができた」と笑顔で語った。

体育大会当日、新聞部は今年も4回速報を発行しました。速報新聞を手に取り読んで下さったみなさん、ありがとうございました。

【高島拓馬】

1位の青龍団デコレーションパネル

白虎団のキレある応援

アメリカ語学研修に出発
1年生 国際英語コース

1年1・2組（国際英語コース）の53人は、7月7日にアメリカ英語研修に出発した＝**写真**。一行は26日までの日程で、オレゴン州ポートランド近郊でホームステイを行いながら、英会話の授業やフィールドトリップなどのプログラムをこなして英語力向上を目指す。

研修中、地元の老人ホームでのボランティア活動や、オレゴン産業科学博物館を見学しながらアクションプロジェクトの授業、警察署や消防署を訪問する社会研修など、多彩なアクティビティも計画されている。

今年のテーマはConnect
9月の文化活動発表会

文化活動発表会が9月20日に行われる。今年のテーマは、文化委員会で決定した「Connect～世界とつながる そして未来へ～」。短大体育館でのオープニングに続くステージ発表は、ユネスコ部や英語部、毎年恒例となっている吹奏楽部の演奏や音楽選択者などが出演。各クラスで制作したCMも上映される。

1、2年生がクラス対抗でレーした日本人選手はいたが、ドラフト1巡目に指名されたのは八村選手が初めてだ。NBAのドラフトは日本の野球ドラフトとは違い、全30チームが一人ずつ欲しい選手を指名し、1巡目と2巡目を合わせて60人しか指名されない。限られた者しか選ばれない、狭き門なのだ★そもそも世界のスポーツ競技人口で一番多いのは、野球でもサッカーでもなくバスケットボールだ。しかし国内ではまだまだメジャーとは言えず、Bリーグが設立されるまでテレビの地上波でも試合の中継を見かけることは少なかった★そんな中、県内では2005年から北陸3県初のプロバスケットボールクラブである富山グラウジーズが活躍している。彼らが度々ニュースで取り上げられたり、民間企業とコラボしたりすることで、若い世代がバスケに興味を持つ機会は比較的多い★八村選手が指名された際、「TOYAMA、JAPAN」と会場にアナウンスが流れ、富山県から世界で活躍する選手が誕生したことを強く実感した。若い世代の選手が世界に羽ばたくことは、バスケットボールに限らずあらゆる分野で成功を目指す若者たちにとって、最高の刺激になるだろう。これからの八村選手の活躍に期待したい。

【高野　和】

令和の新しい歴史が始まる。（北米プロバスケットボールリーグ）のドラフト会議が6月20日に行われ、富山県出身の八村塁選手が、アメリカのワシントンを本拠地として活動しているワシントン・ウィザーズから1巡目の全体9位で指名された★今までにもNBAでプレーした日本人選手はいたが、ドラフト1巡目に指名されたのは八村選手が初めてだ。NBAのドラフトは日本の野球ドラフトとは違い、全30チームが一人ずつ欲しい選手を指名し、1巡目と2巡目を合わせて60人しか指名されない。限られた者しか選ばれない、狭き門なのだ★そもそも世界のスポーツ競技人口で一番多いのは、野球でもサッカーでもなくバスケットボールだ。しかし国内ではまだまだメジャーとは言えず、Bリーグが設立されるまでテレビの地上波でも試合の中継を見かけることは少なかった★そんな中、県内では2005年から北陸3県初のプロバスケットボールクラブである富山グラウジーズが活躍している。彼らが度々ニュースで取り上げられたり、民間企業とコラボしたりすることで、若い世代がバスケに興味を持つ機会は比較的多い★八村選手が指名された際、「TOYAMA、JAPAN」と会場にアナウンスが流れ、富山県から世界で活躍する選手が誕生したことを強く実感した。若い世代の選手が世界に羽ばたくことは、バスケットボールに限らずあらゆる分野で成功を目指す若者たちにとって、最高の刺激になるだろう。これからの八村選手の活躍に期待したい。

【高野　和】

今号の紙面

2・3面【特集1】もう一度見直そう、交通マナー
4・5面【特集2】2020年東京オリンピックまで、あと1年。マイナースポーツにFOCUS！
6面【特集3】令和新時代の高校改革～国際高の将来像を探る～

そう、交通マナー

国際生アンケート①
国際生の約半数が自転車通学 ～2012年比で危険運転は減少

新聞部は5月下旬、国際生の自転車マナーに対する意識や実態について、全校生徒を対象にアンケートを行った。有効回答数は男子233人、女子346人の計579人。

Q1　あなたは通学で毎日、自転車を使っていますか？

「はい」と答えた生徒は男子53・6％、女子が30・0％。学年別で見ると、1年生男子46・8％、女子32・1％、2年生男子52・0％、女子24・1％、3年生男子60・4％、女子36・8％で、どの学年も女子が圧倒的に少ないようだ。学校が4月、全校生徒に行った「通学調査」でも全体の自転車使用率はちょうど50％で、約80％だった2012年と比べ、自転車を通学で使う生徒の数は少なくなっている。ここ数年のバスのコース新設や増便が理由として考えられる。

Q2　あなたが自転車に乗っている時、したことがあるものは？（選択式）

「二人乗り」が男子12・0％、女子17・1％、「傘差し運転」が男子8・6％、女子6・7％、「スマホの使用」が男子20・2％、女子23・9％、「並列運転」が男子31・8％、女子45・3％、「イヤホンの使用」が男子24・9％、女子36・4％だった。他にも、飲食しながらの運転や、片手運転をしているという回答も見られた。実に約半数の生徒が「並列運転をしたことがある」と答えた2012年と比べると、危険運転をする生徒の割合は少なくなっているようだ。特に、2012年に女子の結果が26・6％だった「傘差し運転」の割合が大きく減少し、3年生は0人という結果だった。これは、学校で自転車使用の許可を得てステッカーを交付してもらうために、現在は「雨天時は雨具（レインコート）の着用」を条件にしている（2012年にはこの条件がなかった）ことが大きいと考えられる。

しかしトータルすると、自転車を通学で使っている人数の多い男子よりも、女子の方が危険運転をしている割合が大きいようだ。集団で行動することが多い女子は「私だけじゃないから大丈夫」と思う心理が、男子よりも顕著に働いているのかも知れない。

Q3　自転車に乗っていて、危険だと感じた、あるいは事故に遭ったことはありますか？

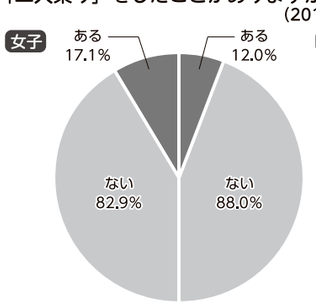
「はい」と答えた生徒は男子24・8％、女子32・4％。男女ともに、自転車に乗っている時に危険を感じたことがある生徒は10人中約2、3人と、多い数字だ。Q2の結果と合わせると、危険行為を行っている割合と危険を感じた割合が約同数だった。具体的な状況を聞くと、「車との接触」という回答が最も多かった。他には前方不注意が原因となるものが多く、電柱に衝突したり、用水に転落したり、歩行者とぶつかりそうになったという回答があった。前方不注意は車と接触する原因の一つにもなっていると考えられる。また、車の飛び出しに遭遇した生徒も、前方不注意が原因となり危険な状況に陥った生徒と同数程度いた。車社会である富山県では、走っている車の数に比例して危険運転も多くなるのが現状だ。自転車を運転する時は、普段からルールを守るだけでなく、周囲に注意を払うことが必要である。

7年前とは問題が変化

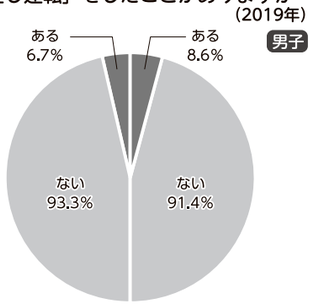
今回のアンケートを通して2012年と2019年の国際性を取り巻く交通事情を比較すると、自動車を利用する生徒割合の減少など、いくつかの変化が見られた。

2012年に大きな問題として取り上げられていた傘差し運転は激減した。しかしその代わりに大きな問題となっているのが、スマホを使用しながらの運転とイヤホンの着用だ。

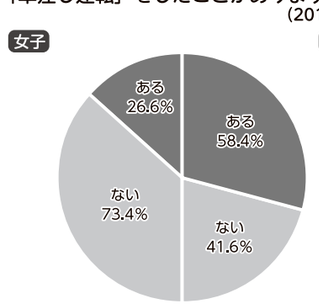
時代とともに交通事情は変化し、その時々によって焦点となる問題は異なる。しかしいつの時代でも変わらずに重要なのは、ルールを守ろうとする国際生それぞれの意識だろう。



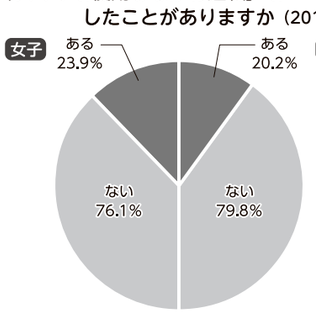
グラフ1「二人乗り」をしたことがありますか（2019年）



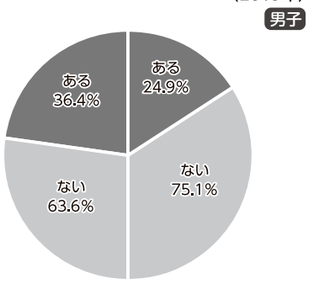
グラフ2「傘差し運転」をしたことがありますか（2019年）



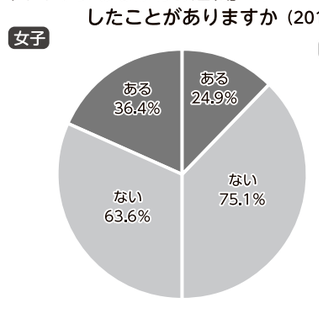
「傘差し運転」をしたことがありますか（2012年）



グラフ3「スマホを使用しながら運転」をしたことがありますか（2019年）



グラフ4「並列運転」をしたことがありますか（2019年）



グラフ5「イヤホンしながらの運転」をしたことがありますか（2019年）

国際生アンケート②
高齢ドライバーの運転に不安感

自転車マナーについてのアンケートと同時に、最近話題となっている高齢ドライバーについて、国際生や周囲の高齢者がどのように考えているのか、アンケートを行った。

Q4　自分の家族に、65歳以上で今でも車の運転を続けている方はいますか？

「はい」と答えた生徒は全体で49・6％。国際生の家族の、高齢者の2人に1人が運転を続けている。

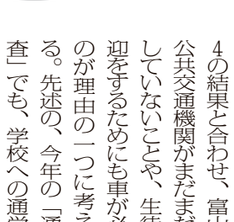
Q5　自分の家族で、車の運転免許を返納した方はいますか？

「はい」と答えた生徒は全体で10・5％だった。国際生の周りで、免許を返納したという例は多くないようだ。Q4の結果と合わせ、富山県の公共交通機関がまだまだ発達していないことや、生徒の送迎をするためにも車が必要なのが理由の一つに考えられる。先述の、今年の「通学調査」でも、学校への通学手段が「自家用車での送迎」という生徒が、全体で実に9・5％もいた。祖父や祖母に学校まで送迎してもらっている、という生徒もいるだろう。そのような場合、「免許を返納したくてもできない」というのが実情なのかも知れない。

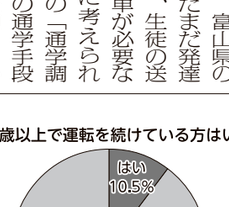
Q6　高齢者が車を運転するのはやめてほしいと思いますか？

「はい」という答えが全体で56・6％と、過半数を占めた。その理由として「危険、不安」「事故が多い」が大半で、昨今の事故の報道などを反映し、車社会の富山県でも高齢ドライバーの運転に対する不安が生徒の間で高まっていることを示している。

また、「いいえ」と答えた人の理由として多かったのは「交通手段が無くなるのは困る」だった。他にも「安全運転ができるなら年齢は関係ない」「それぞれの自由にさせるべきだ」「人によって違うので一律に言えない」などの肯定的な意見も見られた。さらに、「バスなどの公共交通機関を普及すべき」など、もっともな意見も挙げられた。【馬場比来里】



グラフ6 家族に65歳以上で運転を続けている方はいますか



グラフ7 家族で自動車免許を返納した方はいますか

国際生の自転車マナーをチェック
3日間で違反者多数

新聞部では6月5～7日の3日間にわたり、登校時（8時25～40分頃）と下校時（16時30～45分頃、校門と駐輪場の近くに立ち、国際生の自転車の乗り方をチェックしてみた。なお、この期間は体育大会前の団活動のため、全校生徒の放課時間は同じ。

5日(水)
登校時　イヤホン4人、並列10人、ながら運転1人
下校時　イヤホン5人、並列8人
学校から出て1人になるときにイヤホンをつけている人が多かった。校舎から目の届く範囲だと、先生に見られるかもしれないと考えているのだろうか。また、校門を抜けて広い道に出たところで並列になり、友達と話しながら運転している人が見られた。
今回は学校の近くのみで調査したが、学校から離れるにつれて、違反者の数が増えるのかどうかも検討の余地がある。

6日(木)
登校時　イヤホン4人、並列5人
下校時　イヤホン5人、並列5人
バスが校門から出る時に、その目の前を自転車で減速せず飛び出してくる生徒がいた。幸いにもバスが急停止したため大惨事には至らなかったが、バスの急停止がなければその生徒やバスの中にいた生徒たちも無事ではすまなかっただろう。
国際高校に乗り入れるバスの本数は数年前と比べると増えている。生徒を迎えに保護者の方々が車で来ることも多い。学校の敷地内でも、車に接触する危険は多いだろう。

7日(金)
登校時違反行為なし
下校時　傘さし運転1人、片手に何かを持ちながらの運転1人
この日は雨が降っており、道が濡れている状態の中、校門を出た辺りから片手に何かを持った状態で走行する生徒がいた。最終日も違反者ゼロとはいかなかった。

歩道をふさぐ国際生

国際生の安全意識の低下が問題

3日間で計48人（登校時25人、下校時23人）が違反していた。この調査は新聞部が2012年にも行っているが、前回の調査では見られた二人乗りやスマートフォンを使用しながらの走行は見られなかった（2012年は二人乗り1件、スマートフォン3人）。

しかし、スマートフォンのさらなる普及のせいか、イヤホンを使用しながらの走行や、友達と会話をしながらの並進運転が多くなったようだ。

特に下校時は、授業も終わり時間にも余裕ができて気が抜けるのか、友達と楽しそうに話しながら並列する女子が多く見られた。並列に走行しながら会話をしている時、顔は横を向いているため前が見えておらず大変危険な状態だった。

男子は、並列走行よりもイヤホンを使用しながらの運転が多く見られた。イヤホンを着用することで周りの音が聞こえなくなり、危険を察知する能力が低下する。

また、新聞部が認識したトータルの違反件数が前回の調査より約2倍に増えたこと（2012年は3日間で28人）は由々しき問題だ。国際生の安全運転への意識が低くなっていると言える。

私たちは自転車の運転に慣れている。普通にしていれば、転んだりすることも、運転の制御が効かなくなったりすることもないだろう。

当たり前だと思うかもしれない。だが、それは私たちがそう思っているだけだ。

自動車のドライバーの視点に立ってみて欲しい。時速数十キロで走る自分の車の数十センチ先に、ふらふらと自動車を運転する高校生がいる。しかも彼はイヤホンをつけていて音楽に夢中だ。自分が彼の脇を通過する時、もしも彼が運転を誤ったらどうなるだろうか。数百キロから数トンの自動車と接触すれば、生身の人間は容易に大怪我を負ってしまう。

自動車と自転車で事故が起こった時、罪に問われるのはほとんどの場合自動車の運転手だ。自分はまだ、自動車を運転しないから関係ないと言えるだろうか。その運転手があなたのお父さんやお母さんならどうするか。

ひとたび事故が起こってしまえば、加害者の側も被害者の側も、それまでの生活が一変してしまう。それがあなたの周りで起こらないという保証など、どこにもないのだ。そんなことを考えて、もう一度自分や、自分の友だちの交通マナーを見直してみて欲しい。

違反行為の罰則

●走行中のイヤホン使用
富山県は走行中でのイヤホン使用を富山県道路交通法施行細則で禁止しており、使用した場合は公安委員会遵守事項違反により検討され罰金が課せられる。（五万円以下の罰金）

●並列運転
自転車で並列に走行することは歩行者や車の走行の妨げになり道路法第17条に違反している。（二万円以下の罰金又は科料）

●ながら運転
片手にスマホ、傘、飲み物等を持ちながらの運転は安全運転義務違反に該当しもし他人に危害を及ぼした場合には交通法第119条に違反する。（三ヶ月以下の懲役、又は五万円以下の罰金）

1
住居が多く、高い生垣で見通しがきかない。

2
高い塀のある駐車場、私有地なので通り抜け禁止。

3
歩道が無く飛び出し注意。用水に転落の危険も。

4
交通量の多い交差点

特集1

もう一度見直

「危険な目に遭ったことがある」
～周辺住民の声

新聞部では、2012年の調査時と比べ、国際生の交通マナーはどのように変化したかを知るため、7年ぶりに国際高周辺の住民の方に聞き取り調査を行った。答えてくださったのは6人の方。

前回の調査と同じく、「国際生の交通マナー」について聞き取りを行ったが、今回は特に、通学で使っている国際生の自転車の運転について重点をおいた。

「（国際生の自転車マナーは）悪くないよ」（60代男性）という声もあった一方で、「左右を確認せずに走っていく生徒がいる。車は左右を確認していても、自転車側が左右を見ないで来るので危険」（70代女性）、「学校の敷地から出てくる時に止まらない生徒がいる」（40代男性）、「学校の駐輪場から急に飛び出してくる生徒がいる。飛び出しが当たり前になっているのではないか」（60代男性）、「スマホを見ながら運転している生徒がいる」（40代男性）、「（学校近くの）ローソンから幼稚園に向かう狭い道を、確認しないで出てくる生徒がいる」（50代女性）といった、具体的な自転車マナーの悪さを指摘する声が多く挙がった。

前回、7年前に行った調査でも「一旦停止をしない」や「十字路での飛び出し」といった、今回と同じような声が挙がっており、学校付近でもまだまだ自転車のルールやマナーを守っていない生徒がいるのが現状のようだ。

いただいたご意見の中には「（国際生の自転車が原因で）過去、危険な目に遭ったことがある。（国際生の自転車が飛び出してくる可能性などを）周りに注意喚起している」（60代男性）という厳しい声もあった。改めて、国際生は交通ルールやマナーについて再認識する必要があるだろう。

また、「駐輪場付近のミラーが違う方向を向いていて、役目を果たしていない。改善してもらいたい」（40代男性）というご指摘もあった。

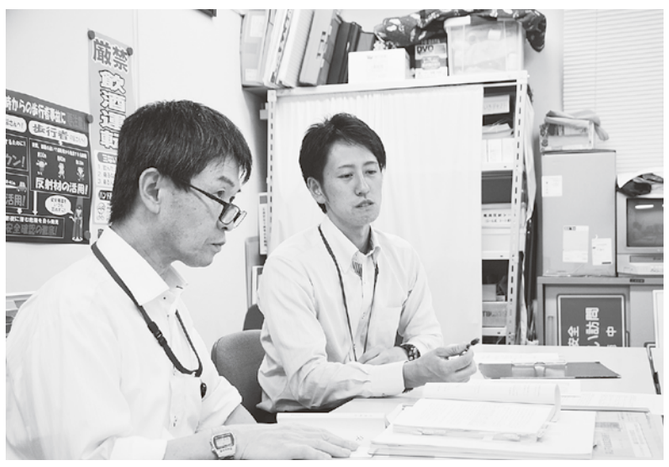
【解説】

今回新聞部は7年ぶりに、地域の方々に生徒の交通マナーについて聞き取り調査を実施した。以前に比べ、自転車マナーは改善されているという意見がある一方で、国際生の自転車マナーの悪さを指摘される声が多く、「いつか事故に遭うのではないか」と心配する声もあった。新聞部が行った生徒アンケートでも、「自転車で交通事故に遭った」や「もう少しで事故に遭いそうだった」という回答も見られ、国際高周辺以外でも自転車マナーの悪い結果が実際に現れている。自転車運転に関するルールやマナーに関しては、小中学校で交通安全教室を受けたり、本校でも「交通安全講話」で傘差し運転や携帯・スマホを見ながら運転することなどの危険性を教えてもらって十分、分かっているはずだ。自分や他人の生命を守るためにも、普段から見守ってくださっている地域の方々の今回のご意見、注意喚起してくださる先生方や家族の声を、一人ひとりが真剣に受け止めなければならない。

【髙田和輝】

慣れや油断が一番危ない
～富山県警に聞く～

新聞部は6月7日、自転車のマナーや高齢者の運転について調べるため、富山県警察本部を訪れ、交通企画課の山本慎悟さんと大谷祐史さんにお話を聞いた。



統計資料をもとに説明する山本さんと大谷さん

ルールを守れば事故は起きない

最初に、富山県内の交通事故件数と種類について聞いた。交通事故は、5月31日現在で921件。昨年全体で2839件だったことを考えると、かなり少ない。そのうち、死亡した人が16人、ケガをした人が1044人となっている。富山県は18年連続で交通事故が減少しており、これは全国でも、富山県と山口県のみだそうだ。

この中で高校生が関わった交通事故は69件あり、死亡した人はおらず、ケガが78人だった。また、このうち自転車の事故は10件だったという。

「現時点で死者が出ていないことは喜ばしいが、引き続き厳しく警戒に当たっていく」と山本さんたちは話した。

次に自転車の運転について、特にスマホ、イヤホン、傘さしなどの「ながら運転」の現状と対策について聞いた。先述の自転車乗車中の事故10件のうち、歩行者との事故が2件、車との事故が8件で、原因は一時不停止などが多い。警察の統計の中には、「ながら運転」が事故の原因かどうかは、数字としては出てこない仕組みになっている。ただ、事故原因と違法行為は当然、別の問題。山本さんは「法律的には自転車も車両であり、場合によっては凶器になりうる。意識を持って運転してほしい。信号機で一時停止することや、ながら運転をしないなど、交通ルールやマナーを守らなければなりません」と強調した。

続けて、自転車の交通事故が多発する場所や時間帯、季節についても聞いた。季節的に、自動車事故が多いのは1月で、原因はスリップ事故の増加と考えられる。昨年は雪が多く、1月と2月の事故が多かった。一方、自転車事故は5月から増え始め、特に晴れの日が増え、小学生から高校生が夏休みに入る夏場にピークを迎えるそうだ。

さらに、事故が多発している場所は、富山市内だと五福が44件、呉羽が15件と多い。この数字はほぼ道路の交通量に比例している。国際高がある願海寺周辺では3件だった。大谷さんは「慣れや油断が一番危ない。狭い道や入り組んだ道だから事故が起きやすいということはない。広い道の方がスピードを出せるため、大事故につながりやすい。慎重に運転してほしい」と指摘した。

国際高校の周囲には8号線と旧8号線がある。どちらも非常に交通量の多い道路だ。これらの意見を参考に、ぜひ事故のないようにしたい。

高齢者には根気強く声掛けを

また、最近ニュースなどで特に話題になっている、高齢者ドライバーの交通事故についても聞いた。県内では、昨年65歳以上の高齢者が絡んで起こった事故は1052件で、事故全体の37・1％だった。高齢者率も上がってきているため、一概には言えないが、昔に比べると多くなってきている印象だそうだ。

高齢者による事故をなくすために私たち高校生にできることについて尋ねると、山本さんと大谷さんはそろって「事故のリスクを減らすために、高齢者の方には根気よく声かけをしていくことが大事」と話した。しかし、「高齢者に無理矢理に免許を返納させるようなことをすると、行動範囲が狭くなり、ふさぎ込んでしまうことがある」と警鐘も鳴らす。特に公共交通機関が少ない富山県では、高齢者でも車に頼らざるを得ない状況にあり、運転免許の返納については、家庭の中で慎重な判断が必要だそうだ。

この問題に対して、高校生の私たちができることはあるだろうか。大事なのは、家庭内での密接なコミュニケーションだと言える。あなたにも身近に高齢者ドライバーの方がいるかもしれない。そういう時、危ないから運転を止めろと命令口調で言うのではなく、さりげなく別の交通手段を勧めたり、彼らの移動を補助したりするなどといった気遣いが欲しい。事故を減らし、かつ高齢者の方々に生き生きとした人生を送ってもらうためにも、私たち家族が、子どもや孫の立場からできることを考えていくことが重要なのではないだろうか。

最後に、交通安全について県内で独自に行っている活動に関して聞いた。県警では、高齢者のために「やわやわ運転自主宣言」運動を実施している。この運動では「雨が降ったら運転を控える」など、高齢者に自分で宣言してもらうことにより、事故を減らすことを目標としている。また、「安全運転宣言」カードを配布し、宣言した内容を常に確認してもらうようにしている。また、小中学生に対しても、交通マナーを守るための教室を実施しており、中学校では最新のVR（バーチャル・リアリティ、仮想現実）技術を利用し、事故の危険性を伝えているそうだ。

「やわやわ運転」は富山県警独自の取組み。

事故に遭わないための究極のアドバイスとして、山本さんと大谷さんは「人も自転車も、すべてルールを守って確認していれば事故は起こりません。交通ルールを守りましょう」と繰り返し強調していた。

【米田喬生】

まとめ

今年に入って「あおり運転」や「高齢者ドライバーによる事故」といったニュースを耳にすることが多くなった。「幼児の列に高齢者が運転する車が突っ込んだ」などという悲報を聞くたびに、どうしてそれを防ぐことができなかったのだろうと心が痛む。交通安全はいつでも重要なテーマだが、今こそ改めて国際生の交通に関する意識を高めるために、この特集を組んだ。

実は7年前にも、新聞部は国際生の交通安全意識に関する調査を行っている。その時のアンケートを元に、現在の国際生にも同じアンケートを取り比較を行ってみた結果、興味深いデータが得られた。

まず前回に比べ、傘差し運転などの件数は大幅に減り、全体的には国際生の安全意識は高まっているという調査結果になった。しかしイヤホンをしながら自転車を運転したことがあると答えた人は依然として多く、実態調査でもイヤホンを使用しながら自転車を運転している生徒が見られた。これはスマートフォンの普及によるものだろう。

イヤホンを使用しながらの運転は、安全な走行に必要な交通に関する音や声が聞こえない状態になるため、富山県では条例で禁止されている。

こういった運転による事故を未然に防ぐためには、まず自分たちの自転車の乗り方について見直す必要がある。普段当たり前のようにしている運転行為が、客観的に見ると非常に危険で、時に加害者になりうる行為であることを認識してほしい。

国際生の安全意識と並んで新聞部員の中で関心が高かったのは、高齢者の危険運転についてだった。

車社会の富山県では、高齢になっても車を利用せざるを得ないことが多い。生徒アンケートでも、家族で免許返納した人がいると答えた件数は非常に少ない。

高齢ドライバーによる事故の一因として、若い頃と比べて身体の衰えを自覚できず、自分の運転技術を過信している部分もあるという。そのため国や地方自治体は、高齢ドライバーへの講習等を実施し、自らの運転技能を確かめる機会を増やしている。県警への取材記事にある「やわやわ運転」がその一例だ。

しかしどれだけ行政が努力したところで最終的に重要になるのは、高齢者ドライバーの周囲、すなわち家族の対応だ。おじいちゃんやおばあちゃんなど、高齢で運転している方が身近にいる人は、彼らの体調の変化や運転の仕方に気を配ることが大事である。

事故は小さなことが積み重なって起こるものだ。県警の山本さんと大谷さんは、慣れと油断が一番危ないと述べていた。毎年多くの事故が起こることはないか聞いてみたが、警察からはあまり言われていないとのことだ。だが、本校周辺の住民の方々からの苦情はあるそうだ。具体的には、「一時停止の場所を止まらない」や、「通ってはいけない場所を通っている」といったものだ。このようなことは、周りの人にも迷惑がかかるだけでなく、何よりも自分自身が事故に遭いやすくなってしまうため、改めて注意が必要なのではないか。

ルール以前にマナーを守る

最後に、交通安全について生徒一人一人に考えてほしいことを聞くと、橘川先生は「だろう運転はダメ」と即答した。「こんな所から自動車が飛び出して来ないだろう」「渡れるだろう」「危なくないだろう」という考え方をするのではなく、「もしかしたら自動車が飛び出してくるかもしれない」「ここは危ないかもしれない」といった「かもしれない運転」を一人一人が心がけることが大事だと指摘した。さらに、「ルールを守るのはもちろんのことだが、マナーも守ってほしい。近いからとか、誰も見ていないから、法律で禁止されていないからなどという自分勝手な考えではなく、交通マナーを守ることが自分自身を守ることにつながるのだと理解して、行動してほしい。そういう思いで先生達は指導しているのです」と橘川先生は熱く話してくれた。

【横田航大】

コンビニに続く小さな路地。

保育園の駐車場に面している歩道の無い道路。

見通しが悪く、飛び出し注意。

「かもしれない」運転をこころがけて
～生徒指導部長の橘川先生に聞く

新聞部は6月5日、本校生徒指導部長の橘川幸治先生に国際生の自転車マナーなどについて話を聞いた。

まずは、以前と比べ生徒の交通マナーは良くなっているのか。「自転車のマナーは良くなっている」と橘川先生。その要因として、学校付近で交通事故があった場合は学年集会などで、先生方が生徒に交通安全について厳しく指導するようになったことを挙げた。以前は、家で保護者などが教育するのが当たり前で、学校では特に厳しく指導していなかったが、近年は学校でも生徒に直接、指導するようになり改善されてきた。

しかし、避けられない危険もある。「並んで歩いている歩行者を後方から来た自転車が追い越そうとした場合に、どうしても車道を走行することになるといった状況が危ない」と、まだまだ注意が必要な点も挙げた。自分中心で周りのことを考えないで歩いている人も多く、そのような人を避けるために車道を走ることになる自転車が危険な目に合う可能性がある。また、最近はエンジン音がとても小さい車が多く、イヤホンをつけていたりスマートフォンに集中していたりすると、車に気付かずに衝突してしまう可能性がある「ながら運転」も危険だと指摘した。

周辺住民の方々に配慮を

次に、学校周辺の危険箇所について聞いてみた。本校前の斜めに入る路地や、ローソンから大学につながる細い道が挙げられたが、最近ではこのような道を通る生徒は少なくなっているようだ。各教室に、このような危険な場所が記載されているプリントを掲示し、事故に遭わないように注意を促しているという。また、万が一事故に遭ったとしても、生徒の側が悪くならないように優先道路を通らせるようにするといった工夫で、事故による被害を減らしているそうだ。

警察などから国際生の交通マナーについて注意されていることはないか聞いてみたが、警察からはあまり言われていないとのことだ。だが、本校周辺の住民の方々からの苦情はあるそうだ。具体的には、「一時停止の場所を止まらない」や、「通ってはいけない場所を通っている」といったものだ。このようなことは、周りの人にも迷惑がかかるだけでなく、何よりも自分自身が事故に遭いやすくなってしまうため、改めて注意が必要なのではないか。

ルール以前にマナーを守る

最後に、交通安全について生徒一人一人に考えてほしいことを聞くと、橘川先生は「だろう運転はダメ」と即答した。「こんな所から自動車が飛び出して来ないだろう」「渡れるだろう」「危なくないだろう」という考え方をするのではなく、「もしかしたら自動車が飛び出してくるかもしれない」「ここは危ないかもしれない」といった「かもしれない運転」を一人一人が心がけることが大事だと指摘した。さらに、「ルールを守るのはもちろんのことだが、マナーも守ってほしい。近いからとか、誰も見ていないから、法律で禁止されていないからなどという自分勝手な考えではなく、交通マナーを守ることが自分自身を守ることにつながるのだと理解して、行動してほしい。そういう思いで先生達は指導しているのです」と橘川先生は熱く話してくれた。

【横田航大】

毎朝生徒の登校状況を見守る橘川先生

近頃、高齢者の事故が多発している。また、高校生のながら運転による自転車と歩行者の事故で死亡者を出している例も多い。今回、新聞部は「交通事故」という重要なテーマを取り上げ、国際生の現状を徹底調査し、さらに警察などに取材を行った。そして、国際生が事故の被害者にも加害者にもならないために、普段から心がけるべきことを調べた。

特集2

2020年東京オリンピックまで、あと1年。

マイナースポーツにFOCUS!

東京2020オリンピック開催まで、いよいよ１年を残すのみとなった。果たして、私たちはどこまでオリンピックのことを知っているのだろうか。
東京オリンピックでは、スケートボードやボルダリングといった魅力的な競技がいくつか追加される。そして、国際生の中にも、将来有望な選手がいる。
オリンピックが日本で開催されるという貴重な機会。オリンピックを知りつくし、楽しもう！

国際生アンケート　オリンピックには7割が関心　マイナースポーツ8割知らず

国際生は、2020年に開催される東京オリンピックについてどんな意識を持っているのか。新聞部は6月、全校生徒を対象にアンケート調査を実施した。有効回答数は680人。

Q1　あなたは普段、スポーツをしていますか?

男子は「はい」が54%、「いいえ」が46%。ほぼ半分に分かれるが、若干スポーツをしている人が多いようだ。それに対して女子は、「はい」が35%、「いいえ」が65%だった。男子と比べ、スポーツをしている女子は圧倒的に少ない。「はい」と答えた生徒がしているスポーツとして、テニスやバスケットボールなど、部活動で行っているものが多く挙げられた。

Q2　2020年東京オリンピックで新たに追加された5種目を知っていましたか?

男子は、「全部知っていた」16%、「いくつか知っていた」63%、「全部知らなかった」21%だった。一方、女子は「全部知っていた」15%、「いくつか知っていた」69%、「全部知らなかった」16%と、男女で回答に大きな差はなかった。「全部知っていた」と「いくつか知っていた」を合計すると、男女とも7割を超える。この結果から、オリンピックに関する情報をチェックしている国際生が多いことがうかがえる。

Q3　①2020年東京オリンピックの「近代5種」などのマイナースポーツの競技内容を知っていましたか?

男子は、「はい」が24%、「いいえ」が76%。また、女子は「はい」が21%、「いいえ」が79%だった。国際生の約8割が知らないマイナースポーツは、まだ認知度が低いと言える。

②このようなマイナースポーツをやってみたいですか?

男子は「はい」が33%、「いいえ」が67%、女子は「はい」が27%、「いいえ」が73%だった。この質問も①と同様に、「いいえ」と回答した人が多数派。やはり、認知度の低さがマイナースポーツに対する関心の低さにつながっているようだ。

Q4　2020年東京オリンピックに、あなたはどのように関わる予定ですか?

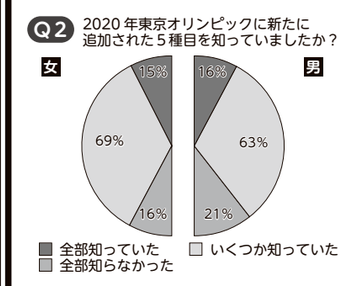
「実際に行く」と答えたうらやましい生徒は男子15%、女子10%。「テレビ、インターネットで見る」は男子55%、女子63%、「新聞記事などで読む」は男子15%、女子16%だった。一方、「関わらない」は男子で14%、女子で10%いた。

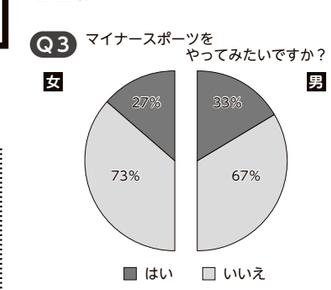
全体的に、自国開催という大きなチャンスである東京オリンピックに何らかの形で関わりたい、という生徒が多かった。

Q5　2020年東京オリンピックで、富山にメリットとデメリットのどちらが多いと思いますか?

男女とも、「メリットが多い」と答えた生徒が80%、「デメリットが多い」と答えた生徒が20%だった。メリットとして、「経済効果がある」、「外国人観光客が増える」というものが多く挙げられた。また、デメリットとしては、「東京に人が流れていく」というものが多かった。どちらにしても、富山県が東京オリンピックによってどんな影響を受けるかを真剣に考えて回答した生徒が大多数を占めていた。

【吉村裕子】





東京オリンピック　追加5種目と「マイナースポーツ」って?

追加5種目

○野球・ソフトボール

野球は男子、ソフトボールは女子がプレーする。9人ずつの2チームが対戦し、3つのアウトを取ることで攻撃側と守備側を交代する。同点の場合は延長戦が行われ、北京2008大会では延長11回のタイブレークが導入された。ソフトボールのオリンピックでの歴史は新しく、女子のみがアトランタ1996大会から正式種目として採用され、北京大会まで実施された。

○空手

競技は大きく分けて「形」と「組手」の二つがある。「形」は、仮想の敵に対する攻撃技と防御技を一連の流れとして組み合わせた演武。「組手」は8メートル四方の競技場で2人の選手が1対1で戦う。攻撃の際に使える技は、「突き」「蹴り」「打ち」の3種類。「組手」の一本は柔道とは異なり、その場で試合が終了するわけではない。

○スケートボード

前後に車輪がついた板に乗り、トリック（ジャンプ、空中動作、回転などの技）を行い、その技の難易度や高さ、スピードなどを評価する競技。オリンピックでは、街の中を滑るようなコースで技を競う「ストリート」と、複雑な形のコースで技を競う「パーク」がある。

○スポーツクライミング

垂直にそり立つ壁をカラフルなホールドを使って、道具を使わずに自身の体のみで登る競技。オリンピックでは、同じ条件で設置された高さ15メートルの壁を2人の選手が同時に登って速さを競う「スピード」、高さ4メートルの壁を制限時間内にいくつ登れるかを競う「ボルダリング」、制限時間内に高さ15メートル以上の壁をどの地点まで登れるかを競う「リード」が行われる。身体能力とテクニック、そして壁を攻略するための読みが大切になる。

○水泳

「競泳」「飛込」「水球」「アーティスティックスイミング」「マラソンスイミング」の5種別からなる。特に飛込は、弾力性のある1・3mの飛び込み板より跳ね上がって飛び込む「飛び板飛び込み」、5・7、5・10メートルの飛び込み台から飛び込む「高飛び込み」競技の2種類がある。また、それぞれ2人1組で飛び込む競技もある。

○近代五種

1人の選手が1日の間に、馬術・フェンシング・水泳・レーザーラン（射撃・ランニング）という、それぞれに全く異質な5競技をこなして順位を決める、過酷な複合競技。通常20~30分間、2~4人で争われる。審判は5人で、それぞれ1本のライディング（波に乗っている状態）に対し各審判が点数をつける。すべてのライディングの点数のうち、点数の高い方から2本（20点満点）の合計スコアを競う。

○サーフィン

サーフボードを使って波に乗り、テクニックを競う競技。通常20~30分間、2~4人で争われる。審判は5人で、それぞれ1本のライディング（波に乗っている状態）に対し各審判が点数をつける。すべてのライディングの点数のうち、点数の高い方から2本（20点満点）の合計スコアを競う。

マイナースポーツ

「競泳」「飛込」「水球」「アーティスティックスイミング」「マラソンスイミング」の5種別からなる。特に飛込は、弾力性のある1・3mの飛び込み板より跳ね上がって飛び込む「飛び板飛び込み」、5・7、5・10メートルの飛び込み台から飛び込む「高飛び込み」競技の2種類がある。また、それぞれ2人1組で飛び込む競技もある。

○射撃

銃器を用いて標的を撃ち、精度の高さを競う競技。固定された標的を撃つ「ライフル撃ち」と、空中に放出された動く標的を撃ち壊していく「クレー射撃」がある。動きの少ない競技で、集中力をどれだけ高め維持できるかが勝敗を決めるカギとなる。ライバルと戦うというより、各選手が自分自身と戦うスポーツと言える。

○カヌー

小舟をパドルで漕ぎ、速さを競うスポーツとして19世紀にイギリスで発祥した。川や湖、野外の人工コースで行われ、大自然と一体となる爽快感を味わえることが最大の魅力だ。オリンピックでは、流れのない直線コースで一斉にスタートし、着順を競う「スプリント」と、激流を下りながら吊るされたゲートを順通過しタイムを競う「スラローム」が行われる。

○ゴルフ

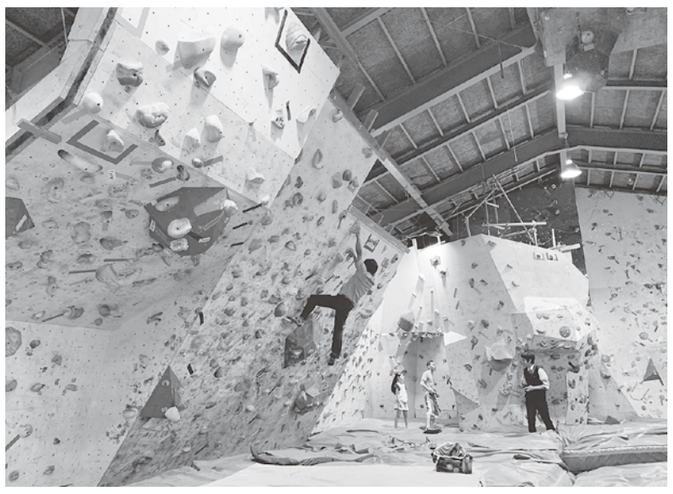
クラブで静止したボールを打ち、直径108ミリメートルの小さな穴までいかに少ない打数で入れられるかを競う競技。競技は1ラウンド18ホールで構成され、選手は4日間で4ラウンド72ホールをプレーする。リオデジャネイロ2016大会で112年ぶりに復活した。

国際生はボルダリング大歓迎です　フリークライミングジム・ゲッコー

新聞部は、国際高から徒歩3分のすぐ近所にあるボルダリング施設、フリークライミングジム・ゲッコーを訪れ、代表の土肥浩嗣さんに話を聞いた。

1995年3月にオープンしたゲッコーでは、以前から20代半ばから30代の男性利用者が多かったが、オリンピックの種目に追加されたこともあって、最近では女性や子どもが増加傾向にあるという。またそれに伴い、回数券の利用も増えているそうだ。本校バスケ部や女子サッカー部も年に数回、利用している。現在、県内のボルダリング施設はゲッコーを含み4か所。以前は全国的にも少なかったが、年々増えて昨年には約500か所に達した。

ゲッコーには広々とした空間に様々な形状、傾斜の壁があり、高さ8メートルのリード壁や登り上がることができるボルダー壁、一番人気な120度壁が設置されている。希望すれば、日本山岳ガイド協会認定インストラクターから丁寧な指導を受けられるそうだ。


様々な壁を体験できる＝フリークライミングジム・ゲッコー

分かりやすく話す土肥さん

土肥さんは高校生の頃から自然の山でクライミングをしていたが、富山県には適する山が少なく、天候が優れない日も多かったためなかなか登れず、「仕事帰りにもしたい」と思ってゲッコーをオープンしたという。物件を探していたら、国際高近くの大きな倉庫がたまたま空いていたのが運命だった、と笑う。初めはなかなか近隣からの理解が得られずクレームも多かったが、今では世間の認知度も高まり、受け入れられるようになったそうだ。

一般的に、ボルダリングは人工の壁を登るというイメージを持たれることが多いが、実際は自然の岩場を登ることを言い、その練習用として人工の壁が作られるようになった。最近ではテレビCMや新聞などのメディアでボルダリングについて取り上げられる機会が増えているが、「取り上げられているのは競技的な部分のほんの一部で、正確な認識はまだされていない。競技内容を正しく知ってほしい」と土肥さんは話した。

2020年に開催される東京オリンピックでは、「スピード」・「ボルダリング」・「リード」の3種目が行われる。「スピード」は高さ15メートルの壁を登り切る速さを競うスプリント種目。「ボルダリング」は、5メートル以下の比較的低い壁に設定された複数のコースを、制限時間内にいくつ登れたか競うもので、身体を使ったチェスと呼ばれている。そして「リード」は、12メートルを超える高さの壁に設定されたコースを登りみると、競技内容を知っている人は2割程度と、やはり認知度は低かった。東京2020オリンピックは目前だというのに、多くの競技を理解していない現状がある。マイナースポーツについてもっと知ることが、競技を楽しむ上でのポイントだと考えた。

そこで私たちは、マイナースポーツの将来有望なオリンピアン候補として、本校の3人にインタビューした。飛び込み種目のダイナミックな演技、ゴルフの飽くなき探究心、スケートボードのライバルとの技の競い合いなど、それぞれの競技に対する強い想いが伝わってきた。また、市内のスポーツ施設を取材し、マイナースポーツの歴史が浅いためコーチの育成も十分ではない現状が明らかとなった。まだまだマイナースポーツは発展途上にあり、メジャースポーツへの仲間入りも十分に期待できそうだ。

今まで知らなかったマイナースポーツについて、その魅力を多くの人に届けたい。そして、日本で開催される貴重なオリンピックで、より多くの競技を楽しんでほしい。

【松田穂乃佳】

まとめ

魅力あふれるマイナースポーツ　知ってオリンピックを楽しもう

最近、今まで馴染みが薄かったスポーツが流行り始めた。ラクロスやスケートボード、スポーツクライミングなど。実際、筆者もマイナースポーツの競技名は聞いたことがあったが、どのようなスポーツかはわからなかった。オリンピックの新競技にマイナースポーツが追加され、疑問は増えるばかりだった。

国際生にマイナースポーツについてアンケートをとってみると、競技内容を知っている人は2割程度と、やはり認知度は低かった。東京2020オリンピックは目前だというのに、多くの競技を理解していない現状がある。マイナースポーツについてもっと知ることが、競技を楽しむ上でのポイントだと考えた。

そこで私たちは、マイナースポーツの将来有望なオリンピアン候補として、本校の3人にインタビューした。飛び込み種目のダイナミックな演技、ゴルフの飽くなき探究心、スケートボードのライバルとの技の競い合いなど、それぞれの競技に対する強い想いが伝わってきた。また、市内のスポーツ施設を取材し、マイナースポーツの歴史が浅いためコーチの育成も十分ではない現状が明らかとなった。まだまだマイナースポーツは発展途上にあり、メジャースポーツへの仲間入りも十分に期待できそうだ。

今まで知らなかったマイナースポーツについて、その魅力を多くの人に届けたい。そして、日本で開催される貴重なオリンピックで、より多くの競技を楽しんでほしい。

【松田穂乃佳】

特集は次ページに続きます ←

将来の五輪選手のタネ育てる　NIXSスポーツアカデミー

新聞部は、富山市婦中町にあるNIXSスポーツアカデミーを訪れ、特に2020年東京オリンピックで新種目として追加されたスケートボードについて、富山市スポーツ課の若松潤さん、所長の柴田隆文さん、監視員の老松一瑛さんに話を聞いた。

（右から）若松さん、柴田さん、老松さん＝NIXSスポーツアカデミー

平成26年5月1日にオープンしたNIXSスポーツアカデミーは、スケートボードやローラーブレード、マウンテンバイクなどの体験を行える屋外施設だ。

この施設が完成するまで、富山県内にはそれらの練習を行なう本格的な施設が一つもなかった。そのためスケートボードのプレーヤーは、セクションと呼ばれる坂を目前で製作し、東富山駅の中央広場などを利用してプレーするしかなく、満足のいくような練習ができなかったという。さらにそのような状態では、歩行者を巻き込む事故になる危険性もあったため、市がそれらの問題を解消しようとこの施設を建設した。

オープン初年度の平成26年度には利用者が1万4031人を数え、27年度には1万2185人、28年度が1万1940人、29年度9084人、30年度に1万0235人と、来場者数はオープン時からほぼ横ばいだそうだ。

利用が多いのは10代~30代といった若者世代が中心で、会社や学校が終わってから訪れる人が多いようだ。新聞部が取材に行った際はまだ早い時間だったため、大人の利用者は少なかったが、2人の小学生がスケートボードの練習に励んでいた。

13歳という若さで数多くの大会で優勝・入賞し、2020年東京オリンピックの選手候補として期待が膨らむ、富山県の中山楓奈選手（山田中）も、放課後にこの施設をよく利用しているそうだ。また、その影響を受け、家族連れの利用者も増えてきているという。県外からは、北は北海道から南は鹿児島まで、20都道府県から776人もの人が訪れている。

世間一般で、いわゆる「マイナースポーツ」と認識されているこれらの競技を普及・振興するために、NIXSスポーツアカデミーでは「アクティブスポーツ教室」を開き、これらの競技の魅力発信や、子ども達の育成を図る活動を頻繁に実施している。他にも、他県の会場と連携して、大規模な大会も開催しているそうだ。

現状、スケートボードはバスケットボールやサッカーなどと違い、まだ歴史が浅く体制ができておらず、コーチの育成も十分ではない。そのため、プレーヤーどうしで技を磨き合い、成長し合っているのだという。また、親が子どもを連れてきて、親子間で指導を行うというケースも多いようだ。

富山県には中山選手のような、世界の第一線で活躍している選手がおり、そのようなハイレベルな選手と同じ環境で一緒に練習を重ねることで成長していくため、選手のレベルが飛躍的に向上しているのだという。

しかし、富山県は年間を通して降水量が多く、雨天時や降雪・積雪時は地面のコンディションが悪く危険なため、オープンすることが難しい。そのため梅雨時や冬季には、隣の用品店にある小規模のプレースペースか、屋根のある新潟県の村上スケートパークでしか練習できないということが大きな課題となっているそうだ。

若松さんたちは、2020年東京オリンピックの新種目としてスケートボードが新たに追加され、注目が集まっている今、「この競技が10年後、20年後により活性化し、今よりもさらに強い選手が生まれ、オリンピックなどの大舞台で活躍してくれるよう、この施設で現在、タネを蒔いている最中なのです」と話してくれた。

【安村萌】

いろいろな「ホールド」をつかんで登る

水泳飛び込み

坂田麗鳳くん（16H）
高さ見せたい

4月、日本室内選手権に臨む坂田君＝東京辰巳国際水泳場

父親である本校の坂田芳寛先生の影響で飛び込み種目に興味をもち、8歳の頃に始めた。この種目の魅力は、水しぶきがたたない演技がとてもダイナミックなところだという。高所から飛び込む恐怖心はあるが、勇気を出して飛び続けることで次第に慣れていくそうだ。

普段は、トレーニング、基礎練習、試合で飛ぶ種目を中心に、日々の練習に励んでいる。練習の中で、技のクオリティを向上させるために一つ一つの動作を意識することを心がけているそうだ。練習後の柔軟（ストレッチ）は必須で、時々コーチの行うケアが疲れを癒すという。

2020年に東京オリンピックが開催されることについて、トップ選手が集結する試合を日本で見られることはとてもすごいことだと話す坂田くんは、イギリスのThomas Daley（トーマス・デーリー）選手に憧れを抱いている。デーリー選手は、北京オリンピックのイギリス代表の最年少選手で、2009年には国際水泳連盟の10メートル高飛び込みの部門で世界ランキング1位に輝いた。一般的に身長が高い選手は不利になるが、デーリー選手は178cmあるにも関わらず、オリンピックでメダルを獲得したり、世界選手権で優勝したりしている、とデーリー選手の魅力を語った。

国内のジュニアの中では、坂田くんが一番身長が高いので、高さを見せる部分では誰にも負けないという。現在、技の回転数や完成度を上げることが課題だそうだ。また、国際大会に出場したり、全国大会で入賞したりすることが今後の目標、と力強く語った。

国際高のオリンピアン候補 3人にインタビュー

新聞部は、さまざまな大会で活躍している国際高在籍の将来のオリンピアン（オリンピック選手）候補にインタビューした。特に、マイナースポーツと言われる競技に取り組んでいる3人に、その競技の魅力や始めたきっかけなどを聞いた。

ゴルフ

野村昂生くん（36H）
敵はいつも自分自身

昨年8月、中部ジュニア選手権に臨む野村君

8歳の誕生日にゴルフセットをプレゼントされ、祖父の勧めで本格的に競技を始めた。小学校4年生で初めてゴルフの大会に出場。富山市西部中学校3年生の時に臨んだ2016年県マッチプレー選手権で、中学生として初めて決勝に進出した。この競技の魅力は、「いつも敵が自分自身であること」だと話す。普段は、反復練習を中心に練習している。ゴルフ競技では集中力が大切だが、1日5分の集中が限度。そのため、集中力を持続させるよりも切り替えが大切だという。練習後は風呂に入ったり、ストレッチをしたりすることで体のケアをしているそうだ。

昨年8月に行われた第44回県アマチュアゴルフ選手権で、初の栄冠を獲得した。続く11月の2018県マッチプレーゴルフ選手権でも、ハンディ5・4までのAクラスで初優勝を果たして2冠を達成し、プロへの階段を着実に上っている。

2020年東京オリンピックでゴルフ競技が行われることについて「とてもうれしい」と大きな喜びに浸る野村くんは、女子プロゴルファーの竹内美雪選手に憧れており、「彼女の周りの人を思いやる優しい人柄が良い」と話す。

ゴルフ競技は完璧が限りなく遠く、常に完璧を追い求める姿勢がこの競技を続ける上でのモチベーションになっているそうだ。「誰にも負けないという気持ち」が自分自身の長所だと語った。現在は、「自分を知ること」が課題だという。日々の練習に励み、「まずはシード選手になり、ゆくゆくはプロゴルファーになるのが目標」と意気込む。

スケートボード

西脇ももこさん（12H）
好きな気持ち誰にも負けない

FULL PUSH JAM2018山梨ラウンドでKグラインドという技に挑む西脇さん

スケートボード競技を始めたきっかけは、いとこの影響。小学校5年生の頃、いとこがスケートボードを始めたのを見てやってみたいと思ったそうだ。常に友達と競い合いながら、どうやったら技が上手くなるかや、大会で勝ちたいと考えているという。競技の恐怖心に対しては、仲間やライバルに負けたくないという気持ちで打ち克っている。平日は放課後に2時間くらい練習し、休日には1日中練習することが多いそうだ。晴れている日は富山市婦中町にあるNIXSスポーツアカデミーで練習している。基礎練習を中心に、新しい技にも挑戦中だ。練習中に怪我をすることが多いため、練習後の柔軟（ストレッチ）が大切だという。

2020年東京オリンピックでスケートボード競技が追加種目になったことについて、「スケートボードの知名度は低いから、オリンピックをきっかけにいろいろな人に興味を持ってもらいたい」と話す西脇さんは、アメリカのMariah Duran（マライア・デュラン）選手に憧れる。「女子があまりやらない技を軽々とこなすところがかっこいい」という。

現在、トレフリップという技に挑戦している。トレフリップとは、足を板からふり抜いて、板を横に360度、さらに縦に1回転させる技だ。「スケートボードが好きな気持ちは誰にも負けません」と話す西脇さん。モチベーションが低いと技の成功率も下がってしまうので、メンタルを強化することが現在の課題だそうだ。最近は2、3位になることが多く、優勝することがこれからの目標。全日本にもつながるAJSAという大会にも挑戦したい、と目を輝かせた。

【松田穂乃佳】

続・海外特派員通信

「違い」を興味や文化に

藤井千聖さん（31H）
Fromアメリカ

毎回好評の、海外留学中の国際英語コース生による「海外特派員通信」。今回は、昨年8月からアメリカ・ルイジアナ州のO.Comeaux High Schoolに留学していた藤井千聖さん（31H）に伝えてもらう。

ダンス大会で。藤井さんは前列中央

こんにちは。私はアメリカ、ルイジアナ州のラファイエットにて約10カ月の海外留学を経験しました。私の留学の目的は、英語力の向上、また、異文化交流のためでした。

私が何より印象に残っていることは、多くの文化、歴史に触れることができたことです。ルイジアナ州にはメキシコに由来する方々が多いことから、町のフェスティバルではメキシコの「死者の日」のモニュメントがあふれていたり、州一番の観光地であるニューオーリンズは、かつてフランスの植民地だったためフランスを想起させるような街並みが広がったりしていました。また、ルイジアナ州は1960年代に起こったCivil right movement（アフリカ系アメリカ人の公民権運動）の主な舞台でした。ニューオーリンズ、そして私が住んでいたラファイエットにも、アフリカンアメリカンの誇りが築かれています。コンクリート柱には彼らがどのようにして権利を手に入れたのかが絵で描かれ、街を歩けばアフリカンアメリカン発祥のジャズの音楽が聞こえてきます。教科書だけではなく、自分の目と耳と足で感じる彼らの誇りには、とても重みがありました。

学校では、アメリカの視点で学ぶ授業がとても興味深かったです。特にアメリカの立場から学んだ第二次世界大戦が一番印象に残っています。また私は、学校の授業の他に学校外の活動も活発に行いました。ホストシスターと一緒にダンススタジオに通い、様々なイベントで踊ったり、いくつかのコンクールにも参加したりしました。最後のコンクールでスカラシップを取った時は本当にうれしかったです。

しかし、思い返せばいい思い出ばかり、という訳ではありません。当然、理解できないことがあったり、逆に自分が理解されずトラブルになったりしたこともありました。留学中のトラブルの原因の多くは、私たちと現地の人たちの間にある違いだと私は考えています。学校のシステムから洗濯機を回す回数まで、私は留学先で数え切れないほどの違いに出会いました。不幸にも、日本人は周りと違うことを嫌います。そして、そんな日本で何年も暮らしてきた私たちは、頭の中に日本の常識というものが植え付けられています。だから私は現地で、大きく違っている周りが私の当たり前とはかけ離れているということに苦しめられました。

ここからはこれから留学を控えている方へのアドバイスになりますが、そんな時は、その違いを理解して受け止めるという、受け身で自己解決な方法よりも、その違いについて正直に、そして積極的にホストファミリーや友達に話してみることをお勧めします。留学生を受け入れてくれる方々は、その子が自分たちと大きく違うということへの理解に努めてくれます。そういう方々にとって違いは悩みではなく、興味であり文化なのです。よく話すことでお互いの理解も深まり、違いが悩みではなく自分のアイデンティティになるはずです。どんな些細な違いでも構いません。ふとした違いも大きな話の種になります。

これから留学する方は、悩みをずっと溜め込まないということだけは必ず気をつけてください。そして、実りのある留学生活を送れることを祈っています。

部説

“奨学金破産”
～あなたも他人事ではないかも知れません～

「奨学金破産」という言葉を知っているだろうか。進学のために奨学金を借りたものの返済ができず、職についても生活が苦しくなり自己破産に追い込まれる、という問題を表した言葉だ。

文部科学省によると、2018年度の大学進学率は53・3％でおよそ60万人。国民の2人に1人が大学に行く時代になっている。その大学生の2・6人に1人が奨学金を借りていると言われている。

奨学金破産をする人は年々増加しており、現在では年間約1万件以上にのぼっている。仮に破産すれば、クレジットカードを作ったり家や車のローンを組んだりすることができなくなる。また、安易に自己破産を行うと連帯保証人や保証人へ一括請求が行ってしまうという大変な事態に陥る。

なぜ奨学金破産が起こるのか。それは大学・大学院を卒業し、奨学金の返済が始まったものの、就職した職場環境がブラックだったり、非正規雇用だったりして、思うような収入が得られずに返済が滞ってしまうケースが多いようだ。

大学生は親を「連帯保証人」とする場合が多いが、利用者本人の返済が滞ると、連帯保証人に返済が求められる。定年後世代の親は収入が少なく、子に代わって返済する経済力がない場合も多く、その結果、親子ともに自己破産してしまうという最悪のケースが生じるのだ。ある調査によると、奨学金を借りた大学中退者のうち、半数が年収200～300万円ほどだという分析結果が出た。大学を中退したからといって、奨学金の返済が免除されるということはない。その場合は、さらに奨学金破産のリスクが高まるのだ。

今後、奨学金を利用するかもしれないという人は、今のうちから自分が利用できる奨学金制度について調べて準備をしておくことが大切だ。また、借りる前に借入総額の確認と返還シミュレーションをすることも、破産を防ぐためのポイントである。

「大学や短大在学中に必要な金額」から「用意できるお金」を引き、「不足する金額＝奨学金として借りたい金額」を計算する。余分なお金は借りず、必要最低限のお金を知ることが必要だ。さらに、奨学金は住宅ローンなどと同様、繰上返還（まとまったお金を一度に返すこと）により金利負担も軽減され、その後の返済が楽になる。例えば長期休暇などの授業に余裕がある期間に、アルバイトに力を入れてまとまったお金を繰上返還することも有効な手段だ。

進学後の生活をどう過ごすかはそれぞれの選択だが、奨学金の返済に追われて勉強やその他の活動がおろそかになるのでは進学した意味がない。進学後の学びを有益なものにできるように、計画性をもって励むべきだ。

【松田穂乃佳】

エネルギッシュなステージに圧倒
劇団ingの演劇EDDIE（エディ）を鑑賞

今年度の芸術鑑賞が7月9日、射水市の高周波文化ホール（新湊中央文化会館）で行われ、全校生徒が劇団ｉｎｇの演劇「ＥＤＤＩＥ」を鑑賞した＝写真。31年間にわたり上演され続けている本作品は、今回でなんと公演回数1965回に達した。

本作品は、ボクシングトレーナーであるエディ・タウンゼントが主人公。1914年にハワイ・ホノルルで生まれたエディは、1988年に癌で亡くなるまでに数多くのチャンピオンを育て上げてきた。

そんな彼はある日、ダイヤの原石の少年と出会う。当時まだ中学2年生だった井岡弘樹だ。友であり、師弟である二人は、互いに信頼を深めながらチャンピオンロードを歩んでいく。この物語は、井岡弘樹がチャンピオンになり、初防衛戦に勝利するまで、二人の師弟関係を通して夢・挫折・友情・人間愛など、様々なことが描かれている。

先の試合で世界チャンピオンとなった井岡は、トレーナーであるエディと寝食を共にしていた。そこへ現れた、松本という青年。彼は、エディが井岡の次のチャンピオンと称する男だった。そんな彼の元に突如届いた、父親の訃報。彼は田舎に残された母親と妹を養うため、大好きなボクシングを辞めることを決意。一方、エディは癌に身を冒されていた。容態が悪化し、一旦ジムを離れ休養に入ることに。井岡は彼が入院してから全く練習が身に入らなかったが、一度病院を訪れ弱ったエディの姿を見て以来、見違えるように練習に打ち込んだ。次の試合は絶対に負けられない、と強く心に誓ったのだ。

そして迎えた、1988年の初防衛戦。いよいよ井岡の出番が迫って来たその時、エディの容態がにわかに悪化、救急搬送される事態となった。試合を目前にして取り乱す井岡。その不安定な状態のまま試合はスタートする。井岡は負けていたが、ベッドに横わるエディの意識は戻らない。不利な情勢が続く中、井岡の頭に小野コーチの言葉が響いた。

「エディさんに恥ずかしくないのか！」それを聞いた井岡は連続してポイントを奪い、壮絶な撃ち合いの末、見事勝利をおさめた。ラジオが井岡の勝利を告げた時、瀕死のエディはかすかに意識を取り戻し、右手でVサインを掲げた後に静かに息を引き取った。

生徒達はエネルギッシュな舞台に終始、圧倒されていた。終演後、高桑生徒会長は「感情移入や声の張りなど、演劇ならではの魅力を感じられた。国際生全員が有意義な時間を過ごせた」とあいさつした。

【前川温美】

特集3

新時代の高校改革
～国際高の将来像を探る～

今年５月１日から、元号が平成から令和に改められ、新たな時代が始まった。われらが国際高では、平成時代には国際英語コースが設置されたり、ＩＣＴ教育がスタートしたりと、大きな変革を何度となく経験している。
また最近、大学入試改革や新学習指導要領、高校の「普通科改革」など、全国的な動きも始まっている。
これらを踏まえ、新しい令和時代には国際高がどのように変化していくのか、を追った。

国際生アンケート

国際交流・ＩＣＴに満足 行事はもっと改善して

現在の国際高の良い点や改善点、ＩＣＴ教育の実態などを生徒の視点から見直すべく、全校生徒にアンケートを実施した。有効回答数は４９６人。

Q1　今まで国際高の授業を受けてきて、総合的に良いと思う点、または改善してほしいと思う点は何ですか?

良いと思う点として最も回答が多かったのは、ｉＰａｄ関連。「わからないことを自分ですぐに調べられる」、「ｉＰａｄを使った授業がわかりやすい」などの意見が挙げられた。この他にも「プロジェクターを利用したプレゼンが簡単にできること」や、「ｉＰａｄで日程や配布物を送受信できること」などがあった。

一方、改善してほしい点では「ｉＰａｄを使用する授業が少ない」や「一部の授業が分かりにくい」、「昼休みを長くしてほしい」などといった意見が見られた。

Q2　授業または学習で、ｉＰａｄが役に立ったと思う場面・アプリを教えてください。(グラフ)

「クイズレット」が28%、「翻訳」が25%、「クラスルーム」が21%。授業以外の場面で生徒が自主的に学習を進めたり、役立てたりするための機能が多く活用されているようだ。また、情報共有が便利になることも、ｉＰａｄの良い点だといえる。

一方、「Ｃｌａｓｓｉ」と回答した生徒は10%にも満たず、学習記録をつける習慣がクラス間で差があったり、活用があまり浸透していないようだ。

Q3　ｉＰａｄを授業でもっと使うべきだと感じますか?

「はい」が83%、「いいえ」が17%。ほとんどの生徒が、もっと使うべきだと感じているようだ。「はい」の理由には「便利だから」や「分からないことを調べられる」といったものが多かった。しかし、「いいえ」の理由には「ｉＰａｄを忘れて来た時に辛い」、「(勉強と)違う目的で使う人も多い」などといった否定的な意見も見られた。

Q4　国際高の取り組みで、他校に自慢できると思うものを教えてください。(グラフ)

「国際交流」が24%と最も多く、次いで「ＩＣＴ教育」、「留学システム」、「研修旅行」が僅差で並んだ。そして「英語能力」が12%と、５番目に多かった。「国際交流」や「留学システム」、「英語能力」の回答が多かったことは、英語教育に力を入れている国際高の特徴が大きく表れた結果だと言える。また、一人一台のｉＰａｄを利用した「ＩＣＴ教育」には、授業の効率化やデジタル機器の扱いに慣れるというメリットが存在する。近年、デジタル機器に関するスキルは重要度を増しており、英語能力に加えてそれらのスキルを身に付けることができれば、今後社会で役に立つ機会は多いだろう。この２つのスキルを学ぶことのできる環境は、国際高の良い点だ。

Q5　国際高校の設備で、導入してほしいこと、または改修してほしいところはありますか?

「はい」が59%、「いいえ」が41%。国際生の約６割が、設備面で導入、改修してほしいものがあるようだ。また、約４割の生徒は、現状の設備で満足している。

Q6　Q5で「はい」と回答した人は、何を導入・改修してほしいですか?(複数回答)

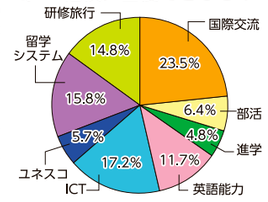
「体育館に冷暖房」が24%で、そのほかの回答に比べ圧倒的に多かった。次いで多かったのは「人工芝グラウンド」10%、僅差で「休憩スペース」、「自動販売機の充実」が同率の９%だった。

Q7　国際高に足りないことや、他校がしていることなどで羨ましいと思うところはどこですか?

「文化祭などの行事をもっと楽しくしてほしい」といった、文化祭に対するマイナス意見が３分の１を占めていた。他には「お昼休みを長くしてほしい」、「45分授業を行ってほしい」、「合唱コンクールやレクリエーションなど、仲を深めることのできる行事がしたい」、「掃除を強化してほしい」、「部活が少ない」、「体操服にポケットがほしい」、「エコ活動に取り組むべき」など、多種多様な意見が寄せられた。

最も回答の多かった学校行事に関しては、まだ改善すべきところがあるはずだ。

【前川温美】



他の高校に聞きました

あなたの学校の自慢は?

新聞部では、県内の他の高校はどうなのだろうと疑問を持ち、持てる新聞部員のネットワークをフル活用して、他校の生徒数人に「自分の学校の自慢」を聞き取り調査した。また、各校の新聞部顧問の先生方にもご協力をいただいた。(学校は順不同)

県立・富山高校
課題は多いが力はつく。職員室前にホワイトボードと勉強スペースがあり、先生に質問や解説をしてもらいやすい。頭が良く、リーダーシップがある人が多いので、班活動なども馴染みやすい。さらに敷地内に17アイスの自動販売機があること。

県立・富山東高校
部活と勉強を両立できること。また、校舎の周りが自然豊かなので心が休まる。近くにコンビニやパン屋があるので便利。

県立・富山南高校
行事がすごく盛り上がること。

県立・呉羽高校
行事が盛ん。(体育大会、芸術祭、球技大会など)様々なボランティア活動を行っている。

県立・富山工業高校
工業高校ということもあり実習授業が多く、先生も実務経験のある人が教えてくださるので分かりやすい。また、設備も充実しており学科ごとに職員室、実習室などがある。

県立・富山商業高校
部活に一生懸命で大会で良い結果を残していること、挨拶やマナーがしっかりしていること。さらに、「TOMI SHOP」という商品販売の実践活動があること。

県立・高岡南高校
生徒会役員やボランティア活動が募集で集まるなど、主体的な活動が多い。「行事のみなみ」という言葉があり、行事への取り組みが熱心。女子の制服がかわいい。

県立・砺波工業高校
挨拶、声が大きい。就職率100%。部活動に力を入れている。地域の人との関わりを大切にしている。

県立・石動高校
部活動に力を入れて頑張っていること。(ホッケー部が強い)自然豊かで、落ち着く。駅から学校までの距離が近いこと。

私立・富山第一高校
生徒の人数が多く、メジャーな部活から他校にあまりない部活まであり、どの部も強く、文化部も運動部も結果を出している。また、学習面では、先生に質問しやすい環境が整っており、本校出身の先生が多いので行事や部活、学習への意欲が高い。

私立・不二越工業高校
工業高校なので他の学校では教わらない専門的知識を学ぶことができ、多くの資格取得のチャンスがあること。また、就職率が100%であること。

私立・高岡第一高校
(生徒)
部活動が強い。あいさつができる人が多い。多様な生徒がいる。教室・特別教室にエアコン完備。パンやドリンクの自販機が多い(14台)。食堂がある。
(教員)
運動部、文化部ともに活動が盛んで、全国大会に出場する部が多い。自由な活動ができる。生徒・教員ともに、何か新しいことを始めようとすることに対して学校側が寛容である。

国際生はイノベーション起こせる
㈱ベネッセ北陸支社に聞く

令和が始まり、政府の教育再生実行会議が５月17日にまとめた第11次提言で、高校生の７割が通う普通科の改革を求めた。そこで新聞部は、全国の高校を知り尽くしている㈱ベネッセコーポレーション北陸支社の森下雄一郎支社長と福澤広隆さんのお二方に、改革の方向性などを聞いた。

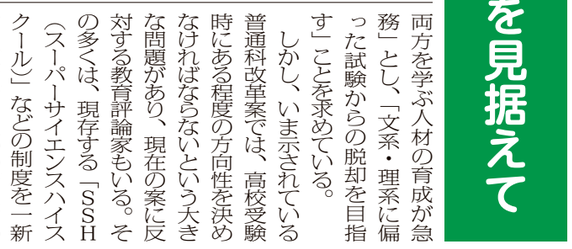
分かりやすく答える森下さん（左）と福澤さん

この提言では、普通科の教育内容が画一的で、生徒の意欲が高まる内容になっていないと指摘。将来のキャリアを設計する能力の育成や国際的なリーダー養成など4タイプを示し、教育内容に特色を持たせるよう促している。

これについて福澤さんは「各学校の特徴がより引き出されたり、学校や地域の活性化につながったりという点が期待されます」と話した。文部科学省が平成30年度に約2万6千人を対象に行った調査では、入った高校の志望理由として「家から近いから」「雰囲気」「合格しそうな学校」という曖昧なものがトップ3を占め、そのうち「学校の取り組みに満足している」という生徒はわずか約6%しかいなかった。逆に、「学校の授業や取り組み」など、明確な志望理由を持った生徒の多くは、学校の取り組みに満足しているという。この結果から、普通科改革が各学校の特徴を引き出せば、明確な志望理由を持った入学者が多くなるのではないか、と考えられる。

この改革による課題は、「全ての高校が特徴に応じたカリキュラムを作り直さなければならない」ことだという。カリキュラムの作り直しは非常に大変な作業であり、全ての高校が行えるとも限らないため、「外面が変わったとしても、内面が変わらないという問題が出てくるのではないか」と指摘した。

もし、この改革が実施された場合、国際高は現在例示されている4つの分類のうち、どれにあてはまるか、と質問してみると、「まずは、国際高の教育目標や留学などの実績からして、『②グローバルに活躍するリーダーの素養の育成』ではないでしょうか。でも、生徒全員がｉＰａｄを持っていたり、情報教育が充実している点からは、『③科学技術分野でのイノベーターとしての素養の育成』にもあてはまる要素があるのではないか」と福澤さん。しかし、「いま挙げられている4つは、綺麗に分けられるものではないと思います。被っている部分があるため、分類するのは難しい。そのため、どのように選んでいくのか、いくつ選ぶのかがポイントになっていくのではないか」と付け加えた。


高校普通科を４タイプに（教育再生実行会議の例示）

重視する教育内容
①進学や就職などキャリアを自身で形成する力の育成
②グローバルに活躍するリーダー、国内外の課題を解決できるリーダーの素養の育成
③科学技術分野でのイノベーターとしての素養の育成
④地域課題の解決を通じ、体験と実践を伴った探究的な学び

そこで、倉田校長先生の「(将来的には)コースの枠組みをなくし、一人一人に合ったものにしていくべきではないか」という考え方を紹介したところ、福澤さんは「先生が与える知識ときっかけをもとに、生徒自身がどうしていきたいのかを考えなければならないようになってきている今、そのような考え方は大事なのではないか」と話した。また、森下さんも「とても斬新でいい。これからの働き方は、会社で働くのではなくプロジェクト単位で動く流れになっている。いまネットと通信制高校の制度を活用した新しい学校が話題だが、(国際高で)生徒が毎日顔を合わせ、あるプロジェクトを数人単位で行うプロセスはその学校でもできず、大変面白い」と興味深そうに語った。

最後に福澤さんは「国際高は、県内でもとても恵まれた教育環境にある。ＩＣＴを自由に使える高校は、県内で数校あるかないかのレベル。だからこそ、生徒の皆さんは自分が何をしたいのかを考え、活用していくことが大事になるのではないか」と語った。また、森下さんは「国際生はイノベーションを起こせるのではないか。自分の環境が恵まれていることを理解しながら、自分たちで行動を起こしていくべき。特に今後、何かを人間らしく皆で話し合い、それぞれ強みを生かして良いものを生み出していくことが、今後の働き方にもつながっていくのではないか」と強調した。

【高島拓馬】

意見を積極的に発表できるスキル必要
「コース」は不要になるかも?
倉田校長先生

平成の時代が終わり、これまでの文理選択という考え方から一転、それを必要としないという考えを主流とする「普通科改革」が進められようとしている。そんな令和時代に必要になると考えられることや、身につけるべきスキルについて、新聞部は倉田校長先生に話を聞いた。

熱い思いを語る倉田校長先生

新しい令和という時代、どのように国際高は変化していくのだろうか。校長先生は「変えていくべきところと、そうではないところがある」と話す。新時代を迎えた今、最も重要なことの一つとして挙げられるのが「国際」という概念。校長先生の考える「国際」とは、「時代や人によって捉え方が変化していく」というものだ。例えば、「日本人は髪の毛も目も黒色で、使う言語は日本語だけ、という固定的な考え方を変えていくべきだ」という。一方、「人種のるつぼ」アメリカ人には統一的な特徴がなく、日本人の感覚における「国際」という考え方自体が存在しない。「私たち日本人は、現在のアイデンティティを捨てず、なお変化に敏感に対応していける人材を目指すべきだ」と校長先生は考えている。

平成時代の本校は、国際英語コースの設置(平成4年)やｉＰａｄの全校導入(平成28年)など、目覚ましい変化を遂げてきた。これまで常に、本校の変革の中心を担ってきた校長先生に、そんな国際高の「平成史」をたどってもらった。

国際英語コース設置に関しては、アメリカなど多くの国々で公用語として使われている英語の習得のみならず、「優れた国際感覚を養い、他の国々に勝てるようにするため」と話す。日本のライバルでもあるアメリカなどは英語を日常的に使用しており、基軸通貨であるドルも彼らの国のものだ。それに対し、必然的に格差が開いたようになっている日本の現状を打開していかなければならない、と校長先生は力説する。

また、本校のもう一つの特徴である、ｉＰａｄ導入をはじめとするＩＣＴ教育に重きを置いた理由は「生徒が本校を卒業する時に、他の高校の卒業生に対して大きな強みを持つことができるからだ」と話した。国際高は他校に比べ、ｉＰａｄをはじめとした情報機器を使って学ぶ時間が多く、本校のキャッチフレーズである「iPad as a Language(言語としてのｉＰａｄ)」と言えるほどの教育環境は、県内では本校だけだ。

ＩＣＴは世界共通のツールである。グローバル化した社会の中でコミュニケーションが取れないことは致命的。ｉＰａｄなどの機器をただの道具としてではなく、コミュニケーションツールとして言語のごとく活用することができれば、英語に匹敵するほどの手段となる。

そこで、「これからもＩＣＴについては最新型のデバイスを取り入れていくのか」と尋ねてみると、「古い言葉を使わなくなるように、古くなったデバイスは新しくしていかなければならない。(これらの機器の活用は)当然、やり出したら続けていかないと、言語のごとく使っているとは言えない」と答えた。これからもある程度、最新のＩＣＴ機器や活用法を取り入れていく方針のようだ。

さらに、「本校に新しいコースを設けるとしたら、どのようなコースが考えられるか」との問いには、「何かないか、というものだ。

しかし、特定の学校だけでなく、より多くの生徒に影響が及ぶためには、現在考えられているような改革が必要ではないかと考える。

これらを踏まえて新聞部では、令和時代に行われるかもしれない「普通科改革」に向けて、本校生徒が変わるべきだと思っていることや、学校の方向性としてこれからも推進していくべきことが何なのかを調査し、新時代の「国際高のカタチ」を新聞部の案として提示したい。

それは、「コースの枠組みの撤廃」だ。令和時代には、インターネットで調べることができる。一般人が当然知り得ないような、圧倒的な知識量を持つオタクも必要不可欠だ」と話した。しかし一方で、「知識だけの人間や中途半端な人間は、これからの時代には不必要になっていくだろう」と警鐘を鳴らす。現代は、調べる方法が分かっていればある程度の知識は得られる。それだけではなく、その知識やデータに裏打ちされた自分の意見をしっかり持ち、積極的に発表できるスキルが必要になってくる。そのために、これからも国際高ではディベートや弁論の能力を高め、自分の意見をどんな所でも堂々と発表できるようになることが、これからの国際生にとって求められていることだ」と校長先生は熱く語った。

【澤田訳太】

まとめ

一歩先を見据えて

５月１日から元号が令和に変わり、政府は全国の高校生の約７割が在籍する普通科に「教育内容に特色がなく画一的」と指摘した。

戦後、新制高校が発足して以来、現在まで手つかずとなっていた「普通科」の教育内容、教育制度の本質的な見直しが現在、最大の焦点となっており、本格的に行われようとしている。

また、大学入試改革の必要性も指摘されており、「文理両方を学ぶ人材の育成が急務」とし、「文系・理系に偏った試験からの脱却を目指す」ことを求めている。

しかし、いま示されている普通科改革案では、高校受験時にある程度の方向性を決めなければならないという大きな問題があり、現在の案に反対する教育評論家もいる。その多くは、現存する「ＳＳＨ(スーパーサイエンスハイスクール)」などの制度を一新するだけでも良いのではないか、と考える。

「自分ひとりで行動する力」ではなく、「グループ単位で行動し、その中で力を発揮する力」が求められる。国際高の特色として他校の生徒と差をつけるためにも、必要なことではないか。

新時代には、高校において教育面だけでなく多くの変化があると考える。生徒・先生の間で、国際高がどのように変わってほしいのかを考えることが大切である。国際高が、どんな変化にも適応できる能力を培うことのできる、より良い学校になることを望む。

【高島拓馬】